



「女らしさ」の文化への束の間の挑戦：日本人女性のライフコースにおける「開かれた窓」としてのガングロ・スタイル

澄田, 明子

(Citation)

社会学雑誌, 25:72-85

(Issue Date)

2008-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011084>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011084>



「女らしさ」の文化への束の間の挑戦

—— 日本人女性のライフコースにおける
「開かれた窓」としてのガングロ・スタイル ——

澄 田 明 子

神戸大学大学院人文学研究科博士課程

ガングロ・スタイルは一九九〇年代後半、女子高生の間で流行したファッションである。濃く日焼けした肌、ラメを使ったメイク、明るくカラーリングした長い髪、ミニスカート、厚底ブーツなどを特色とし、一九九九年にかけて大流行したが、マスコミや社会の強い批判を受け社会問題化し、消滅した。同時期、フリーターの増加、パラサイト・シングルなど、若者が頻繁に社会問題化している。本稿では、日本女性のライフコースという視点からガングロ現象を分析することにより、ポスト工業化した日本社会における若者、そしてジェンダーという二つの要素のメカニズム

を考察する。研究方法としては、ガングロ現象を多く取りあげたティーンズファッション誌二誌を分析した。ガングロ現象が社会問題化した経緯、ガングロ・ファッション、ガングロ少女達の価値観、の三側面を論じることにより、ガングロ現象は、この時期社会問題化した他の若者現象と同様に、若者の反社会的行動というよりも、日本社会のポスト工業化への構造変化がもたらした急激な雇用の悪化を背景に、精神的、経済的に自立したり、自己実現したりする機会を十分に得られなかった若者の事例であることが明らかにする。

一 後期近代社会における若者と社会変化

過去数十年の間に主要な工業国での若者のライフコースは変化を見せている。これらの社会では、企業が製造部門を大規模に海外に移転したことにより基本的経済構造が製造業からサービス業へと移行した。それにとりま

う社会変化により、就学、就職、結婚、家族形成と、かつては比較的画一化していた若者のライフコースは不明確なものとなった。後期近代におけるイギリス社会の若者を研究しているファーロン^[1]とカートメルによれば、後期近代社会の若者のライフコースは、それ以前の社会の若者のものと比べてより長い教育、または訓練期間、そしてより個別化されたライフコースの移行パターンを

示す傾向がある。そして、このような変化はリスクとチャンスの両方、例えば、親への依存やアイデンティティ形成の長期化、家族形成の先送りなどのリスクとともに、より多様化された人生における選択肢、ライフコースの移行時期の個別化といったチャンスの要素を生み出している。しかしながら、このようなリスクとチャンスは若者に均一には分配されず、階級や人種、性別といった既存の社会秩序によって、リスクをより多く経験するグループとチャンスをより多く経験するグループに分かれるとも指摘している(Furlong & Cartmel, 1997)。

宮本は日本の若者のライフコースにおいても同様の変化が見られると指摘している。戦後の日本では年功序列の賃金制度や終身雇用制度が発達したことにより、安定した雇用形態のもとで就学、就職、結婚、家族形成へのスムーズな移行が可能になった。このライフコースパターンは比較的画一的で、社会階層の違いにより、就学から就職への移行の時期が異なるだけであった。しかしながら、日本経済の低迷が長期化し、グローバル市場の激しい競争にさらされて日本企業が日本的な安定した雇用形態を保てなくなる一九九〇年代後半には、このようなパターン化されたライフコースは不明確になってきた(宮本、二〇〇五)。

山田によれば、社会・経済的構造という点から見て、一九九〇年代後半までに日本はポスト工業化社会へ移行

し、日本社会はビジネスのシステムを構築、運営する少数の専門家や技術者と、そのシステムを維持する多数の労働者を必要とするようになった(山田、二〇〇五)。宮本、山田両者ともに、そのような社会・経済的な状況を反映して若者の両極化が進んでいると指摘する。すなわち、長期の教育期間を経て大規模な組織に安定した職を得るグループと、意識的または無意識的に高等教育を断念し明確な将来像もないまま不安定な仕事に就くグループへの分化である(宮本、二〇〇五)。

宮本は、このような社会・経済的变化が若者に与えた影響の大きさを日本社会は認識せず、フリーターやパラサイトシングルなどの若者問題を彼らの個人的な問題と片付け、社会の一員にならない若者を批判してきたと説明している。そして、この「若者バッシング」が、若者問題の社会的な側面を覆い隠していると指摘している(宮本、二〇〇二)。本稿では、こうした若者の二極化のなかで現れたガングロ現象に注目し、この時期の若者問題の社会的な側面を、ライフコース的な観点を踏まえて考察する。

二 ケーススタディとしてのガングロ現象研究 ― 枠組みと方法

ガングロ・スタイルは一九九五年頃から主に女子高生

の間で流行したファッションである。濃く日焼けした肌、ラメを使ったメイク、明るい色に染めた長い髪、ミニスカート、厚底ブーツなどを特色とした。一九九八年から一九九九年にかけてスタイルとして確立し、人気も頂点に達したが、伝統的な日本人女性のイメージとかけ離れていることから、売春や薬物使用などの青少年犯罪と関連付けられたり、美的感覚や倫理観に異常をきたした若者としてマスコミでセンセーショナルに取り上げられたりして、「若者バッシング」のターゲットの一つとなった。ガングロ・スタイルは反社会的な行動と理解されて社会の強い批判を受け、社会問題化したことから大多数の女子高校生は興味を失い、二〇〇〇年半ばまでにはガングロは殆んど街から姿を消した。

ガングロ・スタイルが流行した一九九〇年代後半は、若者が社会問題化したケースが数多く見られる時代でもある。戦後、若者は様々な形で社会の注目を集めてきたが、一連の学生運動に見られる学生の政治運動の後には、テクノロジー、消費社会と関連付けて若者を論ずる社会の傾向が見られる。日本経済が発展し、バブル経済期に入る一九八〇年代は、日本の一般家庭にコンピュータなどのハイテク機器が普及し、また若者が消費者として力を持ち始めた時代でもあった。ハイテク機器を使いこなし、消費によって自己表現する若者を「新人類」や「マイコン少年」

などと呼び、新しい時代の象徴とした。しかし、一九九〇年代に入ると、「オタク」や「援助交際」など、ハイテク・消費時代の負の部分象徴するイメージが若者と結び付けられるようになる。バブル崩壊後の一九九〇年代後半には、ガングロ少女、フリーターの若者の増加やパラサイト・シングル現象などが社会問題化し、自己中心的で社会の一員になろうとせず、社会的な責任を果たさない若者というイメージが、当時の厳しい社会情勢を背景として、痛烈に批判された。しかしながら、労働問題に関連しているフリーターの増加とパラサイト・シングル現象に関しては近年研究が進み、若者の自己中心的で反社会的な行動という従来の見方から、長引いた不況と日本社会のポスト工業化への移行を反映して受動的にこうした状況に追い込まれていったと解釈できる側面もあることが理解されてきている。そのような中であって、ガングロ現象は、反社会的な若者の文化として他の若者現象と共に批判されたにも関わらず、再検証の研究対象となったことは殆んどなかった。

本研究の目的は、若者現象として社会問題化したガングロ・スタイルを一九九〇年代後半の社会状況、すなわち、長期化した経済不況や日本社会の後期近代社会への移行の影響、を視野に入れながら再考察することである。若者の労働問題という視点のほかに、日本女性のライフコースというジェンダーの視点からもガングロ現象を分析すること

により、社会構造の変化を体験した一九九〇年代後半の日本社会における若者、そしてジェンダーという二つの要素のメカニズムを論ずることを課題とする。具体的な研究課題としては、

①一九九〇年代後半、日本社会の社会的、経済的状况はどのようなものであったか。そして、ギャングロ現象はどのようにして社会問題化したのか。

②ファッション、そしてライフスタイルという観点から、ギャングロ・スタイルは何を表現しているか。

③ギャングロの少女達の価値観や人生設計を考えた時、ギャングロ・スタイルはどのような意味を持っていたか。

以上の三点を論ずる。

研究方法としてはティーンズファッション誌から資料を集め、分析に用いた。いわゆるストリートファッション誌と呼ばれるジャンルの雑誌では、ギャングロ・スタイルの女の子達の豊富な写真と彼女達のファッション、生活、将来への希望等、多岐にわたる数多くのコメントが全国規模で集められていたので、社会現象としてのギャングロ・スタイルを研究する上で雑誌の分析は適した手法だと思われる。具体的には、当時ギャングロ雑誌と呼ばれていたギャングロ・スタイル専門誌『egg』誌と、女子高生のファッションス

タイルの専門誌でギャングロを多く取り上げた『Cawaii』誌の一九九五年から二〇〇〇年までのバックナンバーを用いた。雑誌の編集者のコメントやファッション業界の宣伝目的の記事と区別するため、基本的にはギャングロの少女達の氏名や年齢、学校名などの個人情報と併載されている写真やコメントを集め、ファッション、交友関係、趣味、学校、希望する職業、将来像などの項目に分けて分析した。

ヤングファッション誌の他に、ギャングロが社会問題化した経緯を検証するために、『週刊ポスト』、『SPA!』、『週刊女性自身』の三週刊誌からギャングロに関する記事、写真、イラスト等を収集し、それらの雑誌に見られるギャングロの少女達のイメージを分析した。

三 一九九〇年代後半の社会情勢と日本社会のギャングロ現象への反応

欧米諸国では、一九七〇年代からポスト工業化による若者への影響が、例えば失業率の上昇などの形で現れたが、日本では、好調な経済状況とその後のバブル経済によって、ポスト工業化による影響を人々が感じ始めたのは一九九〇年代であった。バブル後の不況により、日本企業は生産業を人件費の安い海外に移転し、付加価値の高い産業が国内に残された。そのような産業においては、高学歴者や高度

な技術を持つ労働者が必要とされた。第三次産業は拡大したが、小売業等のサービス産業においては、低賃金のパートタイマーや契約社員が歓迎された。結果として、高卒等、高等教育を受けない若者の労働市場は急速に縮小し、一九九〇年代後半、特に高卒女子は第二次産業で女子の雇用が減少したこともあり、かつてない厳しい就職状況を経験した。

雇用や将来に対する不安を感じたのは若年層だけではなく。一九九八年に全年齢層で自殺件数が大幅に増加したことは社会不安の広がりを示唆している。そのような世相の中で、ガングロ・スタイルは若者の問題的行動として受け取られ始める。週刊誌におけるガングロの少女のイメージは、「顔黒」という当て字から連想される未開の地の原始人や、ヤマンバという別名に由来する妖怪的なイメージなど、「他者」を象徴している。彼女達の間だけで通用する造語を多用するため、一般人には理解不可能な「エイリアン」として扱われたり、薬物使用や売春等の青少年犯罪に関わっているように描かれ、倫理観の欠如した社会のはみ出し者とされたりすることも多い。その理由としては、携帯電話、マルチメディア、ITなどの最新技術に囲まれて育ち、人格が十分に形成されなかったためと説明される傾向があった。守弘が八〇年代以降のオタク現象の考察で指摘するように、技術の進歩への人々の不安や失望が、

そのような新技術に囲まれた育った若者に投影されていると捉えることができる（守弘、一九九三）。

他のガングロに対するイメージとしては、一般的な女性に敵対する者や理想的日本女性と全く逆の容姿、性格を持つ者などがある。特に女性週刊誌では、低学歴、低所得で、粗野な者として描かれる事が多く、真面目に人生を送る女性の恋人、夫や息子を誘惑する性悪な女性として描かれたり、子供に無責任で自己中心的な非常識な母親とされたりすることもある。日本女性の「白い顔」のイメージの歴史的形成を研究した声刈によれば、明治維新の急激な近代化、西洋化の中で、日本男性の化粧をしていない自然な顔を近代化する日本の象徴とし、日本女性の化粧した白い顔を伝統的な日本の象徴とする事によって、日本社会は近代化、西洋化による国家のアイデンティティ消滅という恐れを克服し、近代化を成し遂げた。明治期以降も、いわゆる中流階級の化粧した日本女性の顔は伝統的な日本文化の素晴らしさ、日本的価値観を象徴するものとして社会に支持されてきたという（Ashikari 2003）。日本社会において女性の白い顔に女性美以上の意味があるとすれば、「顔黒」の少女達は日本的価値観、および日本文化に敵対する者と捉えられたために、社会から激しく批判されたと考えることができる。また、女性の「白い顔」と「中流階級」というイメージが強く結びついているため、「黒い顔」のガングロ

少女達は「下流」出身の無知な若者と受け取られたと考えられる。

四 ガングロ・スタイルの成立と消滅

濃く日焼けした肌、ミニスカートの厚底ブーツの少女達がティーンズファッション雑誌でよく見られるようになったのは一九九五年頃である。一九九八年にガングロ人気は頂点に達したが二〇〇〇年前半には殆んど街で見かけることはなくなった。ガングロ・スタイルの起源としては二つの要素が考えられる。一つはサーフィン愛好家のためのサーファー雑誌である。一九九五年以前からサーファー誌ではサーフィンをするボーイフレンドを浜辺で待つ若い女性のファッションを取りあげていた。日焼けした肌、パール感のあるメイク、トロピカルなモチーフの服、明るい色の長い髪などガングロ・スタイルと共通点が多いが、ほとんどは二〇代の女性で、サーファーの男性と一緒に紹介された。そのような雑誌で女性のファッションが大きく取り上げられるようになり、特集を組まれる一九九五年になると、一〇代の少女達が女の子だけで紙面を占めるようになる。もう一つの要素としては、沖縄出身の人気歌手、明るくカラーリングした長い髪と日焼けがトレードマークの安室奈美江が考えられる。ガングロの少女達には安室ファン

が多く、特に当時、安室のトレードマークになっていた厚底ブーツはガングロ・スタイルに欠かせないものとなった。サーファースタイルの明るく健康的なイメージと、安室ファッションの強く「かっこいい」女の子というイメージがガングロ・スタイルの二大要素となった。

当時の女子高生の文化としては、一九九〇年代前半に大きく話題となった、「コギャル」があるが、ガングロの少女達は自分達とコギャルを区別する傾向があった。ミニスカートの制服にルーズソックスという女の子らしいファッションを好み、コギャルと呼ばれた女子高生は、当時、社会問題となっていた「援助交際」に関わっていると一般的に考えられていたが、ガングロの少女達はコギャルと同一視されることを嫌い、援助交際やその他の青少年犯罪に関わっていない事を強く主張した。彼女達が唯一激しく嫌悪したのは「オヤジ」（中年男性一般）であるが、繁華街で援助交際を求めて声を掛けてくる中年男性への嫌悪がその理由である。後のガングロ・スタイル分析でも取り上げるが、「色黒になること」や「強さ」、「かっこよさ」への強い憧れは、いわゆる中年男性が好む「女の子らしい」コギャルとの差別化と考えることもできる。成人男性の性的欲求を満たす「女性らしさ」に抵抗することによって、当時話題となっていた援助交際等の青少年犯罪との関わりを否定したい少女達の気持ちを、ガングロ・スタイル形成期の一

要因と見ることが出来る。

ガングロ・スタイルの少女達の大半は高校生であったが、高校中退者や短大生も見られた。年齢的には一六歳から二〇歳の者が多く、経済的には中流であることが消費傾向から察せられるが、就学状況を見ると、文化資本という点ではより低い階層に属していると考えられる。ガングロ・スタイルは渋谷などの若者で賑わう東京の地区から始まったが、ティーンズファッション雑誌等により、全国に広まった。ガングロの少女達は、渋谷・新宿・池袋などの若者が多い繁華街に足繁く通い、友達に会ったり、買い物をしたり、ゲームセンターで遊んだりした。カラオケやマンガ喫茶、流行のクラブもお気に入りの娯楽であった。

ガングロという用語は、若者の流行語、「ガンガン（とても）」と「黒い」からの造語で、「とても黒い」という意味である。「ガンガン」を使った他の用例としては、「ガンカワ（とても可愛い）」や「ガン食い（たくさん食べること）」などがある。彼女達にとつて、「ガングロ」は「すぐく日に焼けている」という、褒め言葉であったが、自分達のファッションをガングロ・スタイルと呼ぶことはなかった。彼女達をガングロと呼び始めたのはマスコミで、後には「顔黒」と当て字し、ガングロ・スタイルとは顔を黒く塗るファッションであるかのようなイメージを定着させた。マスコミは、顔を黒く、髪を白くしているとして、彼

女達を「ヤマンバ」とも呼び、原始的で人間を襲う邪悪な妖怪のイメージを形成した。

一九九九年後半から二〇〇〇年前半にかけてガングロの少女達はマスコミの注目を浴び、一般的な日本人女性のイメージや倫理観に反するものとして批判された。少女売春や薬物使用などの犯罪行為だけでなく、乱れた性行為や悪意に満ちた言動など人間性をも疑問視されるに及ぶと、大半の少女達はガングロ・スタイルに興味を失った。一方、少数の者達はマスコミを意識し、より攻撃的になり過激化していったが、二〇〇〇年半ばには全国的な現象としてのガングロ・スタイルは消滅した。

五 文化的なイメージの対比としての自然のイメージ：社会的拘束からの解放

ガングロ・スタイルはサーファー・スタイルの影響を受けたため、海や南洋の島々のイメージを持つモチーフが多い。最も典型的なものはハイビスカスのモチーフである。ガングロの少女達は明るくカラーリングした髪や携帯電話、バッグなどにハイビスカスの花飾りを付け、ハイビスカスのプリントのTシャツやミニドレスを着た。このような自然のモチーフは東京の都心など最も都市化した地区でこそ好んで用いられた。彼女達のお気に入りのブランド、

アルバローザでは、ハイビスカスなどのトロピカルなイメージの服が季節を問わず販売された。真冬であっても、真っ白なコートの内側に色鮮やかなハイビスカスの裏地を用いたようなものが好まれた。スポーツウエアやマイクロミニスカートも「元氣さ」や「若さ」を象徴するという理由で愛用された。

石田によれば、衣服の選択によって人々は自らの周囲の環境を規定し、その環境の中でなりたい自分を表現しようとする(石田、一九九〇)。 gangsloの少女達には都市をビーチに変えようとする傾向が見られた。gangsloの一人、ジュンコはgangslo専門誌、『egg』の中で「私のファッションのテーマは『街をビーチに変えよう!』」だと述べている。リッコも同誌で「麦わら帽子を被らずに首にかけてアクセサリーにしたの。超かわいいでしょー海って感じ!」と渋谷での彼女のファッションを説明している。彼女のデイスコースでは支配的な都市文化と開放的な自然のイメージが対比される傾向が見られる。支配的な文化は都市での日常生活、学校生活などと連想され、自然はそこからの解放を意味している。彼女のファッションとコメントは、文化的な都市の中に自然で快楽的な自分達の空間を作り出し、日常で経験している束縛感から逃避しようとするgangsloの少女達の試みを示唆していると解釈できる。

ブリントンはかつて、アメリカ人女性と日本人女性のラ

イフコース研究の中で、「日本人女性のライフコースの移行は、やり直しがきかず、年齢に即しており、個々人の移行の時期の多様性が低い」と結論づけていた(Brinton, 1992)。すなわち、日本人女性は一度に一つの役割、例えば学生、社会人、母親などをこなし、それぞれの順序立った移行に際しては社会的に期待されている「適齢期」があるとする。また、ライフコースの移行の際に、親や学校、職場などが強い影響力を持ち、女性の選択が社会的に期待されている適齢期に沿うように働きかける。そして、親や学校、職場などの意向は、日本社会の秩序、即ち、職場での出世が可能な男性と低賃金の単純労働を提供する女性、働き続けて一家を支える男性と家庭に入って夫を支える女性というような性別により分化された社会秩序を反映していると指摘した。日本人女性のライフコースの移行における、このような社会的な期待と他者の強い影響力により、日本人女性は日常生活の中で束縛感を体験するといえるのではないだろうか。gangsloの少女達の社会的束縛感からの逃避の試みは日本人女性の固定化したライフコースが後期近代化した一九九〇年代後半の日本社会にあっても大きな変化を見せずに存在していることを示唆していたと考えられる。

六 強くエネルギーシユな女性像

―新しいジェンダーイメージへの試み

少女達のガングロ・スタイルについてのコメントを見ると、スタイルを形成する諸要素には彼女達自身の象徴的な意味が込められていることがわかる。自然のイメージに結びつくモチーフの他には、濃く日焼けした肌、ラメ入りのメイクや厚底ブーツなど、強さや力、若さを連想させるモチーフがある。これらの要素は一般的な日本人女性のイメージには見られないものである。例えば、ガングロの少女達は一般的に女性が用いる「痩せる」という言葉よりはより男性的な「締まる」という言葉を多用した。ガングロの一人、サトミは「黒くしてみたら、ひきしまって見えるし、もう止められない」と日焼けの効果を誌上で説明している。濃く日焼けする理由について、「若い」、「かつこいい」、「締まる」といった強さを示すものの他に、少女達に性的な興味を示す成人男性に対抗するために黒くなるまで日焼けすると言及する者もあり、男性の性的対象になることを拒否し、そこから独立した、力強い女性像を作り上げている。カラオケボックスやゲームセンターで遊び、食堂の定食や回転寿司を好み、若い女性向けの流行のレストランやカフェなどよりは庶民的な牛丼のチェーン店などで食事するライフスタイルには、意識的にいわゆる「女性らし

い」嗜好の逆を楽しむ遊びの要素が見られる。

ガングロの少女達がファッションの参考にしたものにバービー人形があるが、これは欧米社会では社会が期待する「女性らしさ」を反映しているといわれる。しかし、ガングロの少女達にとってバービー人形、およびマイクロ・ミニスカートの代表されるアメリカ七〇年代調のバービー・ファッションは、日本社会の期待する理想の女性像から離れた自由や解放の象徴であった。他の非欧米諸国と同様、日本の社会でもアメリカのファッションはしばしば自由の象徴となる。六〇年代から七〇年代の日本社会において、ジーンズは古い社会秩序からの解放や自由を象徴していた。ガングロの少女達のバービー人形への憧れは、戦後日本の若者のジーンズへの愛着と類似している。日本社会での従来の日本的な女性らしさとは異なる女性像のモデルとしてアメリカのバービー人形が支持されたと解釈できる。

ガングロの少女達にとって厚底ブーツは理想のバービー体型になるために欠かせないものであったが、同時に、平均的な日本人男性を見下ろすことができる程の長身の「かつこいい」女性になれる道具でもあった。厚底ブーツは現実の男女の力関係が逆転するような錯覚を与え、男性には不快感を与えたが、少女達には「かつこよさ」の象徴とされた。このような理想のイメージを実現するために、二〇センチ前後の厚さのブーツを履く少女も多く見られた。

七 革新的なスタイルに保守的な人生観

従来の日本人女性像とは違う自己イメージを作り上げたガングロの少女達だが、ティーンズファッション誌に現れた彼女達の人生観や将来設計は驚くほど保守的である。高校卒業後、進学を予定している者は少数であった。研究対象期間に発行されたティーンズ誌二誌の中で将来の職業や進路に関してコメントしたのは六四人であったが、最も人氣のあった職業は「主婦」で、一人だった。進学を希望していたのは一五人で、三人は専門学校、三人は四年制大学、九人は短大希望であった。短大を希望した理由の一般的なもの「もつと遊んでいたい」や「もう少し学生でいたい」といったもので、短大進学はより良い仕事を得るためのステップというより、学生生活を延長するための手段として考えられていた。大多数は高校卒業後お気に入りのブティックや美容院で数年働き、二〇代半ばまでには結婚して専業主婦になり、子供を産み、幸せな家庭を持つというような、彼女達の母親の世代とほぼ同じ将来設計であった。『egg』誌でのガングロ少女、美恵の将来に関するコメントは「美恵は二〇歳くらいで結婚したいよお。早く子供ほしいしー。絶対にいい家庭を作りたい。それは約束する!」である。同様に、同誌で将来を語る少女達のコメントは、「将来の夢はカワイイお嫁さんになること。幸せ

な家庭を築きたいナ。」や、「やつぱはギャルならシヨップの店員さんでしょー!それ以外なら、やつぱ主婦かな。私、すつごく結婚願望強いんです!」など、高校卒業後に仕事をしても、その後は主婦になるという将来像が描かれている。結婚して家庭に入ることによって幸せな人生が保証されるという人生観がある程度共通して見られる。

社会における男女の役割分担への理解も、そのような人生観に見合って保守的である。男性は一家の稼ぎ手で女性家事と育児を分担するものと考えていた。自らのファッションには敏感であるにもかかわらず、理想の男性像は、平凡な外見でも穏やかな人柄で安定した仕事がある、というごく一般的なものである。

ガングロ・スタイルに象徴される、力強く、開放された自己イメージ、その理想像に近づくために費やされる努力と、彼女達の驚くほど保守的な人生観を考えると、その間の大きな隔たりを認めざるを得ない。しかしながら、進学する意思のない女子高生にとって、ファッションを通して自己イメージを上げることは可能であっても、かつてない厳しい雇用状況であった一九九〇年代後半において、職業を通して自己実現を果たしたり、趣味を通して自己表現する経済的余裕をもったりすることが可能だったのだろうか。一九九二年から二〇〇〇年の間に高卒の女子の雇用件数は五分の一にまで減少したという統計もある。実際、

多くのガングロの少女達は高校卒業前に正社員の仕事を見つけてことができず、卒業後フリーターになっている。フリーターになった者の中には正社員を目指すよりも安定した収入がある男性と出会って結婚することを望む者もいた。

厳しい雇用状況であった一九九〇年代であるが、一方では、一九八六年の男女雇用機会均等法の施行後、日本人女性のライフコースの多様化が注目され始めた時期でもあった。しかしながら、この多様化の恩恵に授かったのはいわゆる一流大学を卒業したごく少数の女性達のみであった。多くの若い女性にとっては、どんな職種であれ正社員になることは困難な時期であった。ローゼンバガーが、日本人女性のライフコースの多様化に関する研究の中で指摘するように、多様化は恵まれた環境の一部の女性のみに見られ、文化的経済的資本の低い女性にとっては、単調で労力を要する仕事を続けるよりは安定した収入の男性と結婚し、専業主婦になる従来のライフコースの方が好ましい選択肢と受け取られる傾向がある (Rosenberger, 1996)。

このような視点から考えると、ガングロの少女達が作り上げた、自由で力強い新しい女性のイメージと彼女達の保守的な人生観の間のギャップは、彼女達の自己実現への強い欲求と、限られた自己実現の機会との間のジレンマに対処するストラテジーと考えられないだろうか。このストラテジーによって、彼女達は想像された文化的空間の中で理想

の自己イメージを楽しみ、現実には社会的に期待されている従来のライフコースに従うことで安定した生活を手に入れることが可能になる。

八 「はじける」時、「落ち着く」時

―ライフコースにおける「開かれた窓」としてのガングロ

ガングロ・スタイルを維持するには実際手間がかかり、少女達にとってはガングロでいること自体が生活の中心になっていたが、彼女達のディスコースでは、ガングロになって「はじける」期間とガングロをやめて「落ち着く」期間の区別がかなりはっきりしていた。「はじける」という表現は高校生活の楽しさや、ガングロになる理由を表す言葉として多用された。「爆発する」や「輝く」という意味も含まれ、自分らしいファッションで、思い切り羽目をはずして楽しむという語感がある表現である。「落ち着く」は「はじけ」た後の、大人としての生活を表す言葉であった。高校卒業時や二〇歳の誕生日が典型的なガングロをやめる時期で、それ以降は結婚、子育てなど、大人として「落ち着いた」人生を送るべきだと考える者が多かった。彼女達にとって高校時代は、大人になって社会の一員として責任を果たしていく前に、ガングロになってしたい事をすべて試

み、遊べるだけ遊ぶ最後のチャンスの期間であった。

ブリントンが日米女性のライフコースの比較研究で指摘したように、ライフコースの各段階で親や教師、会社の上司などに選択肢を制限され、重複したり、やり直したりすることなく「適齢期」に各段階を通過していくような決められた人生を歩む感の強い日本人女性のライフコースのなかで、タンは「開かれた窓」(window of opportunity)と呼ぶべき自由で開放された時期があると主張する。一般的には、学校を卒業し、結婚するまでの独身時代がその時期で、仕事を通して自己実現を果たしたり、収入を趣味に費やしたりして好きな事を楽しむ自由な期間である。日本人女性の国際化に関する研究で、タンは、シンガポールの日系企業で働く日本人女性の大半が、現地では補助的な仕事をするのみで、一定期間働いた後には日本へ帰国、そして結婚を望んでいることに着目し、数を増している日本人女性の海外勤務はライフコースの多様化というよりも「開かれた窓」の期間を延長しようとする試みととらえたほうが妥当だと指摘する (Thang, Goda & MacLachlan, 2004)。

一九九〇年代後半の社会的・経済的に不安定な時代背景を考える時、ガングロの少女達にとっては、高校時代がタンの説明するような「開かれた窓」の期間だったのではないかと考えられる。高校を卒業しても定職につくことは難しく、フリーターや失業者になる者が多かった中で、卒業

後の期間は社会的、経済的にも不安定で自己実現の時間ではなかった。高校時代という「開かれた窓」の期間に好きだけ「はじける」ことによって理想の自己イメージを満喫し、その後は「落ち着いて」従来のライフコースを選び、専業主婦になることによって安定した生活を確保するという考え方はタンやローゼンバーガーの研究結果とも共通点がある。日本人女性のライフコースという視点から見れば、ガングロ現象は高卒の女子の雇用状況の悪化による「開かれた窓」の期間の前倒しと考えることができる。

九 ガングロ現象再考

―後期近代社会の若者の両極化における チャンスとリスクの不平等分配

一九九〇年代後半、反社会的な存在として社会問題になったガングロの少女達であるが、彼女達の文化や価値観を分析する時、後期近代化する日本社会において両極化する若者像が垣間見えてくる。この時期は人生における選択肢、及び選択時期が多様化した時代であったが、そのようなチャンスを多く体験したのは文化的経済的資本の高い、ごく限られたエリート層の若者だけであった。フリーターやパラサイト・シングル現象と同じく、ガングロ現象も、文化的経済的資本の低い若者がチャンスよりもリスクをよ

り多く体験し、精神的・経済的に自立したり自己実現を果たしたりする社会的機会を十分に得られなかったケースといえるのではないだろうか。

ジェンダーという視点から見ると、一九九〇年代後半は、高学歴の女性たちが雇用機会均等法等の成立によって人生の選択肢を増やしていった時代であったのに対して、大多数の女性たちにとっては、就職さえ困難な状況の中で、逆に保守的なライフコースを選択することによって安定した生活を確保した時期だったと考えられる。後期近代社会におけるチャンスとリスクの不平等分配を考える時、優位の男性対下位の女性という単純な対比だけではもはや妥当ではなく、そのような男女差の上に、男性間、女性間でも両極化の傾向があり、複雑な構造を形成しつつあると考えるべきである。

後期近代化の影響が顕著になった社会状況でのガングロ現象を考える時、それはリスクをより多く感じた若い女性達が保守的なライフコースを選び取っていく前の、束の間の自由であったと考えられる。そして、本来ならライフコース全体で職業や日常生活を通して試みるべき理想の自己イメージや自己の実現を、限られた期間内で、「女らしさ」の文化へ挑戦することによって束の間でも実現しようとしたと考えられるのではないだろうか。そのような意味において、ガングロ現象は、反社会化する若者の現象と理

解されるべきではなく、両極化していく若者の一事例であり、リスクをより多く体験した若い女性達のライスコースにおける自己実現のストラテジーであったと捉えられるべきである。

註

(1) 本稿では、アンソニー・ギデンズの後期近代 (late/high modernity) についての議論を踏まえ、現代を、近代とは質を異にした時代という意味での「ポスト近代」ではなく、「近代社会」の運動の帰結という意味での「後期近代」と捉えた。時代概念としての「後期近代」とは近代の特徴が社会生活の隅々にまで浸透することによって、よりラディカルな形式を取り始めた時代である。ギデンズも指摘するように、「ポスト工業化」は後期近代化の一側面を説明していると理解することができる。

(2) ここでは主に、日本社会のポスト工業化による産業構造の変化、その雇用問題への影響、さらには若者のライフコースへの影響という、日本社会の後期近代化の一側面に焦点をあてる。

(3) 文部科学省の『学校基本調査』によれば、進学しなかった高卒人口では、一九九二年に一五%未満だった失業率が、二〇〇〇年には三五%に達している

(4) 警察庁『平成一四年度中における自殺の概要資料』

(5) 『red』誌一九九九年七月号一四ページ

(6) 『red』誌一九九九年七月号一六ページ

- (7) 『egg』誌一九九九年五月号八ページ
- (8) 『egg』誌一九九九年四月号二〇ページ
- (9) 『egg』誌一九九九年四月号二四ページ
- (10) 『egg』誌一九九九年七月号五二ページ
- (11) Kosugi(2004)から統計数値を引用。

文献

- Ashkari Milkio, 'The Memory of the Women's White Faces: Japaneseess and the Ideal Image of Women,' *Japan Forum* 15(1) 2003:55-79.
- Brinton, Mary C., 'Christmas Cakes and Wedding Cakes: The Social Organization of Japanese Women's Life Course,' in Take Sugiyama Lebra (Ed.), *Japanese Social Organization* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1992).
- Furlong, Andy and Fred Cartmel, *Young People and Social Change: Individualization and Risk in the Late Modernity* (Buckingham, Philadelphia: Open University Press, 1997).
- Imamura, Anne E., 'Introduction' in Anne E. Imamura (Ed.), *Re-Imaging Japanese Women* (Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1996).
- 石田佐恵子、一九九〇、「現代の儀礼主義者たち——青年達の外見へのこだわりを考察する——」、藤村正之、高橋雅悦編、『青年文化の聖・俗・遊』恒星社厚生閣。
- Kosugi Reiko, 'The Transition from School to Work in Japan: Understanding the Increase in Freeter and Jobless Youth,' *Japan Labor Review* 1(1)2004:52-67.
- 宮本みち子、二〇〇二、『若者が「社会的弱者」に転落する』洋泉社。
- ―、二〇〇五、「現代社会における若者(2)」、宮本みち子編、『比較文化研究——若者とシェンダー』放送大学教育振興会。
- 守弘仁志、一九九三、「情報新人類論の考察」、小谷敏編『若者論を読む』世界思想社。
- Muggleton, David, *Inside Subculture: The Postmodern Meaning of Style* (Oxford and New York: Berg, 2000).
- Rosenberger, Nancy R., 'Fragile Resistance, Signs of Status: Women between State and Media in Japan,' in Anne E. Imamura (Ed.), *Re-Imaging Japanese Women* (Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1996).
- Thang, Leng Leng, Miho Goda and Elizabeth MacLachlan, 'Challenging the Life Course: Japanese Single Working Women in Singapore,' in Leng Leng Thang and Wei-hsin Yu (Eds.), *Old Challenges New Strategies? Women, Work and Family in Contemporary Asia* (Leiden: Brill Academic Publisher, 2004).
- 山田昌弘、二〇〇五、『現代日本の若者(2)』、宮本みち子編、『比較文化研究——若者とシェンダー』放送大学教育振興会。